

5. 爬虫類

【選定・評価方法の概要】

東京都産（本土部）の爬虫類は外来種を除き 13 種であり、その内訳はカメ類 2 種、トカゲ類 3 種、ヘビ類 8 種である。前回の東京都レッドリストでは外来種である可能性を示しつつもクサガメを評価対象としていたが、2010 年からの 10 年間でクサガメが外来種であることを支持する研究結果が複数発表されていることを考慮し、今回はリストから除いた。その結果、今回の掲載種は前回の 14 種から 1 種減少している。

絶滅のおそれのある評価は、基本的に定性的要件を用いた。東京都産の爬虫類に関しては、分布、生息状況に関する客観的データが極めて少なかったため、水田・森林面積の推移、およびリスト作成のための検討委員による野外観察情報を参考に評価作業を行った。

【選定・評価結果の概要】

評価作業の結果、全 13 種がレッドリストの掲載種に選定された。

ニホンイシガメ、ニホンスッポンについては、それぞれペット用、食用としての流通が以前より多く、そのことを考慮すると、自然分布ではなく放逐された個体が多くを占める可能性が高い。しかし、分布状況の調査、および遺伝的調査が十分に実施されているとは言えず、在来個体の存在が完全に否定できる証拠はない。また、前回の東京都レッドリスト改定時と比較して生息環境が増加したとも言えないため、前回の評価を保持することにした。なお、本評価に影響を与えるものではないが、この 2 種のカメが生息できる環境が東京都内に存在することは、高く評価されるべきものであろう。

ニホンヤモリは、シナントローブ*の代表ともいえる生物で、現時点で絶滅のおそれはないが、個体数の推移に留意が必要である。古い木造の住宅が減り、現在の気密性の高い住宅に置き換わっている状況は本種の生息できる環境の減少につながっている可能性が高い。また、餌となる昆虫類の生息状況も個体数に大きく影響を与える要因となることから、注意を払う必要がある。ニホンカナヘビは日当たりの良い草地等を好んで生息するが、区部では見かけることが減っていることから、急激に個体数が減少している可能性が高く、区部のランクを前回の VU から CR+EN に上げた。原因としては、都市化により雑草が放置されている場所が減少したこと、餌となる昆虫類が減少したことの両方が考えられる。

小型で地中性のタカチホヘビは人目につきにくく、生息数を把握することが難しい。しかし、極めて乾燥に弱く、宅地化が進んだ区部、北多摩では生息していないか、局所的にしか生息していないと考えられるため、データは少ないものの CR と評価した。同様に夜行性で人目につきにくいシロマダラもデータが少ないが、北多摩には生息環境が少ないと思われるので、前回の DD から CR+EN に評価を変更した。ヤマカガシはカエル類を主な餌としていることから、カエル類の個体数に強く影響を受けると考えられる。北多摩、南多摩ではカエル類が好んで生息する水田が減少しており、その結果、本種の個体数が 10 年

前より大きく減少したことが推測され、野外での目撃例も減っているようである。したがって、北多摩、南多摩の評価を変更し、前回の VU から北多摩では CR、南多摩では EN にランクを上げた。前回の総説にもヤマカガシが著しく減少していることに触れられているが、この 10 年でさらに大きく個体数が減少した可能性が高く、今後の推移にきわめて注意を要するもののひとつである。また、ヤマカガシほどではないもののシマヘビもカエル類を餌とするヘビ類であり、水田等の水辺周辺を好む。南多摩の水田が減少していることから、評価を NT から VU に変更した。

毎年同じ場所で繁殖が観察される両生類とは異なり、少ない回数の野外調査で爬虫類の生息状況を把握することは難しい。特に隠蔽性の高いジムグリ、シロマダラ、タカチホヘビでは、気づかずに個体数が急激に減少することも起こりうるため、樹林地面積の減少等に注意を払う必要がある。一方、比較的目につきやすいニホンカナヘビ、ヤマカガシの目撃例が減少していることには、注視をしておく必要がある。特にニホンカナヘビの減少の原因が何であるかは明らかではなく、今後の慎重な調査が求められるであろう。

*シナントロープ *Synanthrope* 寄生や家畜化ではなく野生の生活を堅持しつつも人間の生活活動によって得られる利益を最大限に利用して種の維持繁栄をはかる野生動物。ニホンヤモリのほかにドバト、スズメ、ハシブトガラス、ドブネズミなどが該当する。

[引用文献]

疋田努・鈴木大, 2010. 江戸本草書から推定される日本産クサガメの移入. 爬虫両棲類学会報, 2010(1): 41-46.

(坂田 修一)

爬虫類（本土部）

【記号凡例】

[EX]絶滅 [EW]野生絶滅 [CR]絶滅危惧ⅠA類 [EN]絶滅危惧ⅠB類
 [CR+EN]絶滅危惧Ⅰ類 [VU]絶滅危惧Ⅱ類 [NT]準絶滅危惧 [DD]情報不足
 [*]留意種(選定理由①～⑥はP.11参照) [○]ランク外 [-]データ無し [・]非分布

和名	学名	東京都ランク					環境省 ランク 2020	備考
		区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部		
カメ目	TESTUDINES							
イシガメ科	Geoemydidae							
ニホンイシガメ	<i>Mauremys japonica</i>	CR	CR	CR	CR	CR	NT	
スッポン科	Trionychidae							
ニホンスッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i>	CR+EN	CR+EN	CR+EN	CR+EN	CR+EN	DD	1
有鱗目	SQUAMATA							
ヤモリ科	Gekkonidae							
ニホンヤモリ	<i>Gekko japonicus</i>	VU	*①⑤	*①⑤	*①⑤	NT		
トカゲ科	Scincidae							
ヒガシニホントカゲ	<i>Plestiodon finitimus</i>	CR+EN	VU	VU	NT	VU		2
カナヘビ科	Lacertidae							
ニホンカナヘビ	<i>Takydromus tachydromoides</i>	CR+EN	VU	NT	NT	VU		
タカチホヘビ科	Xenodermidae							
タカチホヘビ	<i>Achalinus spinalis</i>	CR	CR	VU	NT	VU		3
ナミヘビ科	Colubridae							
シロマダラ	<i>Lycodon orientalis</i>	CR+EN	CR+EN	VU	NT	VU		4
ジムグリ	<i>Euprepiophis conspicillatus</i>	CR	CR	VU	NT	VU		
アオダイショウ	<i>Elaphe climacophora</i>	NT	NT	NT	NT	NT		
シマヘビ	<i>Elaphe quadrivirgata</i>	CR	VU	VU	NT	VU		
ヒバカリ	<i>Hebius vibakari vibakari</i>	VU	VU	NT	NT	VU		5
ヤマカガシ	<i>Rhabdophis tigrinus</i>	CR	CR	EN	VU	VU		6
クサリヘビ科	Viperidae							
ニホンマムシ	<i>Gloydius blomhoffii</i>	CR	CR	CR	EN	EN		

和名、学名、配列は「日本爬虫両棲類学会，2020．日本産爬虫両生類標準和名リスト(2020年11月16日版)．日本爬虫両棲類学会」に準拠した。

【備考】

番号1、4～6の種は、最近の研究結果に従って学名を変更した。

- 1: 前回記載の学名は *Pelodiscus sinensis japonicus* である。
- 2: 東日本に生息するニホントカゲの個体群は、2012年に独立種ヒガシニホントカゲとして記載されたので、本改定では和名および学名を変更した。前回記載の和名および学名はニホントカゲ *Plestiodon japonicus* である。
- 3: 最近の研究結果に従って所属をタカチホヘビ科に変更した。
- 4: 前回記載の学名は *Dinodon orientale* である。
- 5: 前回記載の学名は *Amphiesma vibakari vibakari* である。
- 6: 前回記載の学名は *Rhabdophis tigrinus tigrinus* である。

【留意種とした理由】

和名	地域区分	留意種とした理由
ニホンヤモリ	北多摩	家屋等の人工的な環境を好んで住むことから、建築物の材質、構造の変化の影響を受けることが考えられる。自然環境の変化だけでなく、古い木造建築等の減少に継続的に注目していく必要があるため
	南多摩	
	西多摩	